

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第 卷四十二第

行發日一月三年二和昭

## 論 叢

廣告稅論 . . . . . 教授 法學博士 神戶 正雄

ミルの社會學概念 . . . . . 講師 文學博士 米田庄太郎

露西亞の新經濟政策と農業 . . . . . 教授 法學博士 河田 嗣郎

土佐の百姓一揆 . . . . . 教授 經濟學士 黑 正 巖

## 時 論

支那問題管見 . . . . . 教授 法學博士 末廣 重雄

## 說 苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論 . . . . . 教授 法學博士 田島 錦治

琉球の慶長役以後 . . . . . 教授 法學博士 山本美越乃

## 雜 錄

日銀指數利用の一指標 . . . . . 講師 經濟學士 蜷川 虎三

伊太利のリラ貨引上策について . . . . . 經濟學士 松岡 孝兒

長週期景氣循環に關する一研究 . . . . . 經濟學士 菊田 太郎

梅雨考 . . . . . 教授 法學博士 財部 靜治

## 雜 錄

### 日銀指數利用の一指標

蜷 川 虎 三

一口に物價指數と云つても、それが何を語るかは必ずしも明らかではない。具體的に、その有つ意味が與へられて、初めて經濟上の意義を生ずる。このことは、既に本誌前號に於て、筆者の述べた所である\*。

現在、我國に於て調査發表せられてゐる物價指數は可なり多いのであるが、<sup>※</sup>その中殊に、日本銀行の發表する所の東京卸賣物價指數、所謂日銀指數は廣く行はれ、物價騰貴或は物價下落は、常に此の指數の上下を以つて云爲されてゐると云つても決して過言ではあるまい。學者並に實際家の兎角の批評はあるが、何しろ、現在重要視され、實用されてゐることは争への事實

である。

然らば、此の指數は何を語るか、換言すれば、此の指數の値の増加或は減少を以つて、謂ふ所の物價の騰落とは一體何んであるか。此の指數の利用者は、先づ、此の間に答へる責任がある。でなければ、彼等が此の指數に依つて何を語らんとしたのか、又、果して何を論じたのか、經濟上、之を理解することが出来ないからである。併し、此の點に就いては、從來何等の説明も與へられておらず、理解に達する道も開かれてはおらない。

## 二

理論上、一定の立場から——勿論、その立場の明らかでないものは問題外である——日銀指數を批評することは自由であり、又、理論並に實際の何れの方面から見ても實益のあることは云ふ迄もない。併し、より當面の問題であり、緊要なことは、與へられた指數を生かして使ふことである。言葉を換へて云へば、その有つ意味を理解して、利用の限界を明確に定めること

\* 拙稿「物價指數の意味」經濟論叢第二十四卷第二號。

\*\* 我國の物價指數に就いては、藤本博士經濟統計 p. 45、猪間氏論文(經濟學論集第二卷第三號)、郡氏論文(商業經濟論叢第四卷)等に紹介されてゐる。

である。それが測り得るものを測り、測り得ざるものを測らうとしてはならないのである。

此の意味に於て、一定の目的上、物價指數は如何に作らるべきかの問題と共に、與へられた物價指數が何を語るかを研究することは、甚だ重要である。日銀指數の場合に於ても、筆者は此の事を強調したいと思ふ。それは此の指數の眞の利用を可能ならしめるからである。併し、實際問題としては、多くの場合、これは期し得られないことである。云ふことは、甚だ遺憾である。云はねばならぬ。何んとなれば、指數作製に就いて秘密(一)が守られてゐるからである。猪間學士が日銀指數に就いて、次の如く云はれてゐる。

「日本銀行の物價指數は我國の指數中最も權威あるものとして、頻りに引用せられ、之が作製法の理解は極めて必要であるが、不幸にもその多くは秘密に附せられてゐる。……斯る調査に就いては調査當事者自ら進んで其の方法及原材料の詳細を公表せられん事を希

望せざるを得ない。」\*

筆者の考へる所に依れば、詳細に公表しない云ふことは、指數の意味を明確に與へないといふことであつて、全然、指數を發表する目的が失はれてしまふと思ふのである。若し、詳細の公表を嫌ふのであれば、その指數の意味を何等かの形に於て説明しなければならぬ。刀は與へるが、刃が附けてない。それが我國に最も廣く行はれてゐる指數である！ 快刀亂麻を斷つの經濟論の生まれぬことも當然ではあるまいか。恐らくこれは、單に日本銀行の指數ばかりではあるまいと思ふ。

それで、此の指數を利用しようとするれば、與へられたる限りに於て、何かの意味を附けねばならない。何等かの意味に於て理解しなければならぬ。本誌上、嘗つて沙見學士が價格指數或は分類指數なる名を以つて、指數の内容の分析の重要なことを論せられたことは、この意味に於て筆者の深く敬服する所であつて、恐らく、斯かる道を開いて來るのでなければ、日銀

\* 猪間驥一氏「物價指數の理論及實際」經濟學論集第二卷第三號、p. 87.

\*\* 沙見三郎氏經濟統計研究に收む

の指數を利用すると云ふことは、無意義のこととなるであらう。同學士が、更に價格指數の度數分布を扱ひ、或は算術平均に代ふるに幾何平均を用ひ、或は基準の變更を試みた如きことも、斯かる努力の顯れであると、少くも筆者は解してゐる。

併し、平均法を變更することは、少くも日銀の指數が本來有つ意味と離れることは、云ふ迄もない。筆者が本誌前號に述べた意味に於ける貨幣價値の變動を測る指數としては、幾何平均は適當と思はれるのであるが、少くも問題は別となる。日銀の指數をその形に於て意味あらしめ様とすると、沙見學士の論せらるゝ如く、其内容たる價格指數或は分類指數に就いて、研究と吟味とを重ねることは甚だ適切であると思はざるを得ない。少くも一つの確實な方法である。

### 三

筆者は、右の様な考から、嘗つて、日銀指數並に其内容をなす分類指數に就いて、其の相互

の關係を測つて見たことがある。計算を試みた時の少しく古いために、最近の材料を含んでおらぬことは、幾分遺憾ではあるが、追補は他日を期し、取り敢へず日銀指數を利用する際の一指標として、讀者の參考に供さうと思ふ。勿論、與へられた商品數種の價格比率の算術平均を求め、之を分類指數とすること自體、それが何んであるか、甚だ曖昧たるを免れない。更に進んで、價格指數に迄溯るに若くはないが、併し、恐らく價格指數は又多くの銘柄に就いての算術平均であらう。所が、これは秘密である。

それで、分類指數は、ほゞ變化の性質を同うする商品の價格變化の型であると假定し、幾分の目安としようと思ふのが、本文に記す計算の目的である。日銀指數の吟味の一つの足場である。而してそれ以上には出ない。

計算の順序を次に記しておかう。

各價格指數を、前年を基準とするものに換算する。<sup>\*</sup>

そして、右の材料より、前年を基準とする物

\* 同氏、日銀物價指數の研究、經濟論叢第二十卷第三號、第四號、

\*\* 日銀の指數は五十六種の商品の價格に就き明治三十三年十月を基準にして價格の比率を求め、其の算術平均を以てせるものである。

(均平術算 〇〇一年前) 數指類分及數指價物・表一第

雜錄	算術平均 標準偏差 分散係數	年 度 指 數																	
		〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	〇	〇	〇	〇	元	元	毛	兵
日銀指數利用の一指標	100.9	大	三	三	三	三	三	三	九	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.5	四	九	一	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.9	〇	二	三	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.0	六	九	三	三	三	三	九	九	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.1	六	六	三	三	三	三	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.3	六	七	三	三	三	三	二	二	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.3	六	七	三	三	三	三	二	二	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.7	〇	四	二	二	二	二	九	九	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	101.5	五	三	一	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.0	五	九	三	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.0	六	九	三	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.1	六	六	三	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.0	五	九	三	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	100.1	六	六	三	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

\* 油は本来調味料嗜好品中に入る可きものであつたが(猪間氏前掲論文 p. 87 脚註)こゝには燃料中に加へてある。従つて、此の燃料の數字は餘り信ぜられぬがしばらく元の計算の儘掲げておく。

價指數を算術平均に依つて求める。斯くすれば、日銀指數の材料たる價格より、前年に對する正しい騰貴或は下落率が求められる。斯かる方法をとることは、勿論、日銀指數の性質を存せしむることに在つて、誤差法則の與へる平均を採ることを目的としたものではないからである。

物價指數は、かくして前年基準のものとなつたが、次に沙見學士著、經濟統計研究の末尾に附する分類に従つて、分類指數を、前と同様にして求める。その結果は第二表の如くである。

第一表は、大正三年以降に於ける商品價格の變動の状態を想像せしめて、興味ある數字を示

すが、今、それらに就いては問題とせず、此等分類指數の變化相互間の關係並にそれらの物價指數に對する關係を求めて見る。第一表は、その相關係數である。相關係數は零より一の間の値を示し、その(+)なる場合平行伴起の關係、(一)なる場合に逆行關係を示すことは人の知る所である。<sup>\*</sup>歐洲大戰と云ふ特異なる影響のある數年を材料中に含んでゐるから、茲に得た相關係數は必ずしも安定なものではなからうが、併し過去に得た一つの事實として、目安にはなる。又、それ以上は此の場合望んではおらないのである。結果は第二表の如くである。

第二表・相關係數表(%)

物價指數	穀物	調味料嗜好品	織維工業品	金屬	燃料	建築材料	特殊工業品	肥料
雜品	三	三	三	三	三	三	三	三
肥料	六	九	七	三	三	三	三	三
特殊工業品	六	七	三	三	三	三	三	三
建築材料	七	七	三	三	三	三	三	三
燃料	七	七	三	三	三	三	三	三
金屬	七	七	三	三	三	三	三	三
織維工業品	七	七	三	三	三	三	三	三
穀物	七	七	三	三	三	三	三	三

\* 數字材料は日本銀行調査局刊行「物價指數」(大正八年迄の材料を含む)及金融事項參考書に依る。

\*\* 拙譯經濟統計綱要、p. 282

第二表より、日銀指數の變化が、其の内容たる分類指數と如何なる關係程度に在るか、又一の分類指數は、他の分類指數と如何なる關聯を有つて變化するかを窺ふことが出来る。更に第一表に示した標準偏差を用ひれば、右の關係は復歸方程式  $(Y = a + bX)$  として與へられる。

こゝには右の結果を一々説明することを目的としておらない。たゞ日銀指數の實用を可能ならしめんためには、先づ其の性質を理解し、意味を知らねばならぬことを説くと共に、その一指標として、分類指數間の相關係數を示したのである。例へば穀物の値段が騰つたと云ふことは、他の商品種類に於いて如何なる變化の起つてゐることを意味してゐるのか、又、日銀指數の變化は、異なる商品種類に於ける變動を如何に表現してゐるのであらうか、第二表は過去二十年間の事實として、之に對して、何等かの答をなすであらう。勿論指數を理解するためには更に種々なる分析と吟味とを必要とする。本稿に

示す所は、全くその一例に過ぎない。